口腔微生物学分野　講師就任にあたりましてのご挨拶と抱負

松尾（川田）　美樹

鹿児島大学大学院　医歯学総合研究科　発生発達教育学講座　口腔微生物学分野

はじめに

口腔微生物学分野　講師に就任いたしました松尾美樹（旧姓：川田）です。

私は平成７年度鹿児島大学歯学部を卒業し（19期生），九州大学にて博士（歯学）を取得後，鹿児島大学　口腔微生物学分野に６年前に助教として着任し，昨年７月に講師に就任いたしました。

この度，鹿児島大学歯学部紀要への執筆の機会を賜りました。本稿では，これまでの研究，母そして子としてのワークライフバランス，今後の抱負の大きく３つについてご紹介させて頂きたいと思います。

これまでの研究

私は，鹿児島大学歯学部卒業後，九州大学の予防歯科学分野に大学院生として入局いたしました。当時は研修医制度の義務化はまだない時代でしたので，私は卒後研修医にはならず，大学院進学の道を選びました。大学院卒業後は臨床に進む予定にしており，研究者の道へ進むことは全く考えておりませんでした。学部学生のころから学位取得をしたいという気持ちがありました。九州大学への進学を決めた理由は，九州大学予防歯科学分野の教授でいらっしゃった古賀先生が特別講義でされた研究のお話に感銘を受けたためです。しかし，当時の私は学位は取りたいものの，研究とはどういうものか全くわからず入局しましたので，指導医の先生方には大変ご迷惑をおかけしました。大学院生時代は，う蝕細菌・歯周病細菌同定や，う蝕細菌の調節因子の解析を行っておりました。指導医の先生の温かいご指導の元，無事学位を取得することができました。

卒後，研究をもう少し続けたいと思い，九州大学予防歯科にて研究生となり，日本学術振興会の研究員制度に応募しました。採用には至りませんでしたが，その時受け入れ研究室となって下さったのが鹿児島大学に教授として赴任されたばかりの小松澤先生（口腔微生物学分野　教授）でした。これがご縁で助教として採用いただくことになり，鹿児島大学に助教として着任させて頂きました。着任当初は，大学院時代細菌を扱っていたので基礎で細菌研究を行っていくことに支障はないであろうという，安易な気持ちがあったのだと思います。しかし，蓋を開けてみると，何をやってもダメ，結果が出るどころか，かえって周囲のスタッフの足手まといになってしまう始末で，最初の１年は失意の日々を過ごしておりました。臨床研究と基礎研究の違いを痛感した１年でした。当時，私は３歳の息子がおりましたが，幸いにも両親が同居し，子供の面倒を見てくれましたので，私は時間を気にせず研究を行うことができました。さらに，今思えば，助教であるのに，大半の時間を研究のみに充てることができていたのは，小松澤先生の寛大なご配慮があってのことだったと思います。２年が過ぎた頃，鹿児島大学着任後１報目の論文が出たときには，喜びとともに大きな安堵感がありました。着任から現在は，小松澤先生の主要研究テーマである黄色ブドウ球菌の抗菌剤耐性機構の解明とともに，大学院生時代から行っていたう蝕細菌の環境適応機構や糖代謝機構解明の研究を継続させて頂いております。周囲の方々のご指導やご協力を頂きながら研究を行っております。まだまだ技術も発想も未熟な私ですが，一日一日を大事にしながらあきらめずに研究を続けていきたいと思っています。

母として，子としてのワークライフバランス

昨今，女性の参画が叫ばれており，安倍政権においても「女性が輝く日本へ」を成長戦略のスローガンの一つとして掲げています。女性の仕事への参画の機運が高まってきていることは大変良いことであり，今後多くの女性研究者が増え，今まで以上に質の高い切磋琢磨の時代が来ることが非常に楽しみです。しかし，このような国の後押しがなくとも，子育てや介護をされながら，素晴らしい業績を上げてこられている女性

はたくさんいらっしゃいます。そのようなロールモデルと呼べる女性の間にも，多種多様なワークライフバランスが存在しているよう感じます。仕事と家庭のワークライフバランスは，一概に「こうあるべきである」というものではなく，個々の生活環境にあったワークライフバランスがあるべきだと考えています。私は幸いにも，両親のいる鹿児島に戻ることができ，それを家族も受け入れてくれました。そのため，私は大変恵まれた環境にあったことは間違いありません。さらに，近年は保育施設の充実や家事代行サービス等，働く女性にとっては大変ありがたい施設やサービスが増えてきています。私は鹿児島に戻るにあたり，基礎研究者として鹿児島大学歯学部と歯科医療への貢献をしたいという強い気持ちがありましたので，一人ですべてを抱え込まず，受けられる手助けは遠慮なく頂きました。一見厚かましいようでしたが，手を差し伸べて下さった方々に対しおのずと感謝の気持ちが湧いて，さらに仕事を頑張らねば，という気持ちになりました。今でも多くの方への感謝の気持ちが，日々の研究を後押ししてくれています。私のワークライフバランスは，一般的に見てロールモデルになりうるようなものではないと思いますが，研究を行うためにはどうしても時間が重要でしたので，両親や家族の協力の元生活環境を変え，ほとんどの時間を研究に費やせるようにしました。この５年間を振り返ると，周囲（特に両親や子供）に迷惑をかけたことや，しまった，と思うこともたくさんありましたが，低空飛行ながらも墜落はしませんでしたので，結果的にはよいワークライフバランスだったのではないかと思っています。

近い将来，女性のみならず男性にも家事育児の負担が求められる時代が来ると思います。結婚出産で生活環境が変わったら，仕事をするための生活環境を積極的に整える，つまり利用できるサービスや手助けは積極的に頂くことが大事ではないかと思います。そうすれば，仕事量を減らすことなく継続的に仕事ができるようになると思います。結果，職場内での信頼も生まれ，多くのチャンスを与えて頂き，さらなる高みへとステップアップすることも可能になると思います。また，生活環境を整えるにあたって助けて下さった方々への感謝の気持ちを持つことで，自然と仕事への意欲も湧いてきます。私自身も，両親や子供，友人，ラボのスタッフの方々等の理解や助けがなければ研究の量も質も中途半端になり，研究者を続けていくことはできなかったと思っています。今後も，私を支えてくれている方々に常に感謝の気持ちを忘れず，一日一日を無駄なく大切に過ごすことを心がけたいと思っています。

講師に就任して

現在は，自身の研究ならびに大学院生・学部学生の研究指導と，学部学生への講義を主に行っております。講師着任後は，本学男女参画委員会，本学学生生活委員会，歯学部学生委員会に所属させて頂き，多くのことを学ばせて頂いております。また，本年度，歯学部研究体制委員会の下部組織として発足いたしました若手研究者ワーキンググループにも所属させていただいております。本ワーキンググループには現在９分野の若手の先生方が参画し，歯学部の研究活性化に向けて，セミナー開催やメーリングシステムの構築等研究の活性化に向けた話し合いを毎月行っております。我々のような若手にこのような機会を与えて頂いたことで，改めて研究の重要性を認識できる場になると同時に，分野を超えた横の連携の強化が強まり，さらなる研究の発展につながると感じております。また，学外活動として，日本細菌学会の助成による細菌学若手コロッセウムのワーキンググループに昨年から参画させて頂いております。本会は，学会の垣根を越えた若手微生物研究者同士が，自己の研究成果を発表し，切磋琢磨するという非常に画期的な会です。今年は鹿児島で開催させて頂くことになり，代表世話人　小松澤先生の元で，現在慶応大学や国立遺伝学研究所，宮崎大学，群馬大学，学習院大学から成る６名のワーキンググループとともに会の準備を行っております。

昨年講師就任後に，研究者として，さらに子供を持つ親として，本学の学生に向けて，子育てと仕事のワークライフバランスについての講義をさせて頂きました。このような貴重な講義の機会を頂いたことは，講師という役職がいかに責任の重い役職であるかということを再認識した瞬間でした。

講師へのご推薦を頂いた当初は，大変うれしく思った反面，正直私ごときに勤まる役職であるかどうかで大変悩みました。鹿児島大学に助教として赴任して５年が経過した時点でご推薦を頂きましたが，それまでの５年間は，研究と教育を日々こなすことで精いっぱいで，今後の将来展望を考える間もなく月日があっという間に過ぎていきました。

講師就任後１年が経ち，強く感じていることとしましては，研究，教育，運営の時間やバランス配分の重要性です。現在，幸いにもいくつかの委員会に所属させて頂き，学外でも研究会の世話人や学会の準備事務

局等をさせて頂き，助教の頃には経験し得なかった大変多くのことを学ばせて頂いております。教育につきましても，学年副担任をさせて頂き，これまで以上に学生さんたちと接する機会を多く頂いております。これらの教育や運営に加え，研究もこれまで以上に進めたい意欲が強いですので，これらを遂行するための時間のやりくりがまだまだ不十分である点が今の反省点です。

今後の抱負

鹿児島大学に着任させて頂いて以降，たくさんの先生方のご指導ご協力の元，大変貴重な経験をさせて頂いております。また，講師就任後は，これまでにはない多くの経験をさせて頂き，責任の重さを痛感しております。鹿児島大学歯学部に対する感謝の気持ちと共に，歯学部を活性化するための一員となれるよう努力していく所存です。また，研究につきましては自身の研究に加え，研究の楽しさを学生さんたちに伝え，より多くの学生さんに大学院へ進学して頂けるような魅力ある大学づくりの一助になれるよう努力いたします。

最後に

最後までご清覧いただきまして，本当にありがとうございました。これからも何卒ご指導ご鞭撻のほど，よろしくお願いいたします。